

バードリサーチ ニュース

2013年10月号 Vol.10 No.10

Phoenicurus aureoreus
Photo by Toshifumi Miki



お知らせ

バードリサーチ 祝10周年!

神山和夫・高木憲太郎

多くの皆さまに支えられて、バードリサーチは2004年9月の設立から数えて10年目に入りました!これまで数々の調査を企画してきましたが、ここまで続けてこられたのは、調査への参加をはじめ、さまざまな活動を通してバードリサーチを盛り上げてくださった皆さまのおかげです。本当にありがとうございました。

設立当初は何をするのも初めてで、手探りで歩んできたことを思い出します。バードリサーチニュース2004年10月号(http://www.bird-research.jp/1_newsletter/dl/1_2_20041015.pdf)を見ていただくと、事務所とロゴマークが決まったという記事が載っています。バードリサーチのロゴは、コンペを開いてデザインを募集し、その中からイラストレーターの重原美智子さんの作品を採用させていただきました。事務所内では「バーリサちゃん」と呼んで親しんでいます。抽象的なデザインがポイントですが、鳥に見えないと言われることもしばしば(セミと言われたことも)・・・皆さんの反応が心配でしたが、このロゴをあしらったピンバッジを入会された方にお送りしたところ、ブログで紹介していただいたり、帽子に付けて使っていただいたりと、喜んでいただけていることを知り、とても嬉しく思いました。バードリサーチとともに10周年を迎えたバーリサちゃんを、これからもよろしくお願ひします。



写真. 設立当初の事務所. 古い木造アパートでしたが、住めば都でした。

当初の事務所は、とある木造アパートの一室を借りていました。なかなか年季の入った建物で、資料やレーザープリンタを置くと床が抜けるのではないかと心配でしたが、隣の敷地にはそのあたりでは少なくなってしまう水田が残っており、6月

に水が張られると、ツバメが泥を集めに来たり、カルガモが泳いでいたり、カワセミが行き交ったりして楽しませてくれました。その後、スタッフが増えるのに合わせて2回引っ越し、現在は2階建ての事務所になりました。黎明期を越えてさらに一歩踏み出すためにも、今年2人のスタッフを迎え、

7名体制になりました。今後も成長していくバードリサーチを、どうぞよろしくお願ひいたします。

10周年記念集会開催!

これまで活動を支えていただいた皆さんと一緒に10周年を祝いたいと思い、来る12月22日に立教大学で記念集会を行います。日本の鳥類学を牽引してきた次期日本鳥学会会長の上田恵介先生にご講演いただくほか、NHKの自然番組を担当しているディレクターの足立泰啓氏に秘蔵映像とともに撮影裏話を披露いただくなど、皆さんに楽しんでいただける内容を考えています。クリスマス連休の只中ではありますが、ぜひともご参加ください!これまでバードリサーチを支えてくださった皆さまと親睦を深める機会にしたいと思っています。

10周年記念集会プログラム

日時: 12月22日 14:00~17:00
会場: 立教大学5号館5124教室

開会あいさつ(植田睦之)

14:10~14:50 基調講演「わたしが野鳥を調べ始めたころ:野鳥研究入門」上田恵介

14:50~15:10 「みんなで調べるから面白い 普通種のモニタリング」高木憲太郎

15:10~15:30 「シギチドリ調査と市民参加型調査」守屋年史

15:30~15:50 休憩

15:50~16:20 「NHKダーウィンが来た! 裏話」足立泰啓

16:20~16:40 「キツツキ界の異端児 -アリスイの生態-」加藤貴大・橋間清香

閉会

懇親会 18:00~ 立教大学構内カフェテリア「山小屋」にて



活動報告

道北のコハクチョウ中継地 気温が下がると多数が飛来

神山和夫



写真. コハクチョウが渡ってきた大沼.

10月初めに、モニタリングサイト1000最北の調査地である北海道稚内市の大沼を訪ねてきました。ここは日本とロシアを渡るコハクチョウ最

大の中継地で、秋は9月下旬から11月下旬まで、春は3月下旬から5月下旬までコハクチョウの渡りが続きます。大沼では観察施設(バードハウス)に常駐している遠島幸吉さんが、2010年秋からコハクチョウ類がいる期間に毎日個体数調査をされています。この4年間の記録を見ると、コハクチョウは9月下旬に飛来し始め、その後最低気温が急に下がるタイミングで飛来数が増加することがわかります(図)。渡りの時期は、気候や日照時間、餌条件などで決まると考えられていますが、大沼にやってくる際には、気温の変化が関係しているのかもしれない。

遠島さんによると、大沼に渡ってくるコハクチョウはかなり上空から降りてきて急に視界に入るような飛来の仕方をして

ているそうです。多くはサハリンから宗谷岬を通過して大沼の東側からやってきますが、西側のノシャップ岬方向から稚内市上空を通るコースでも渡ってきているらしく、稚内市内にある遠島さんの自宅の上を、夜間に鳴きながら大沼方向へ飛んでいくこともあるそうです。日本に近いロシアのコハクチョウ生息地はサハリンやアムール川下流域にあることが分かっていますが、そこから日本の北端にやってくるにはいくつかのコースがあるのかもしれない。

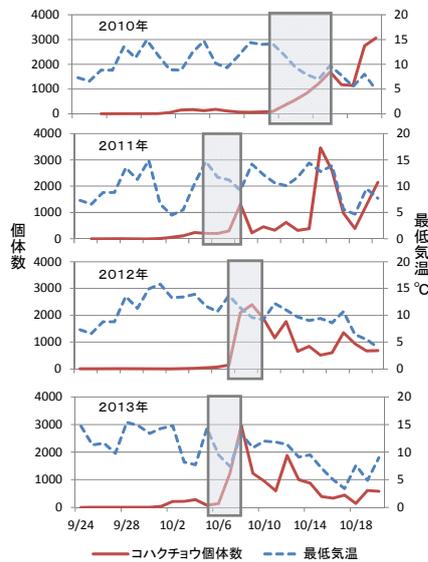


図. 秋に大沼に飛来するコハクチョウの数と最低気温。■は気温低下と個体数増が生じている期間を示す。

秋に大沼に飛来するのはほとんどがコハクチョウですが、春にはたくさんのおオハクチョウが訪れます。稚内の西にあるサロベツ原野でも、秋はオオヒシクイが多いのに、春の渡りではマガンのほうが多くなるなど、彼らは秋と春とで渡りコースを変えているようです。春の雪解け時期や風向きなどが関係しているのかもしれない。この謎を解明していきたいと思っています。

図書紹介

二万年の奇跡を生きた鳥 ライチョウ

中村 浩志 著／農山漁村文化協会 定価 2,500円(税別)

一冊まるごとライチョウづくしの本を寄贈いただきましたのでご紹介いたします。ニホンライチョウは日本の固有亜種で、本州の一部の高山帯にしか生息しておらず、個体数の減少が懸念されています。そのため日本各地の動物園で低地飼育が試みられるなど、保護増殖事業が進められています。保全を行う上で、種の基礎生態を知ることはとても重要です。本書には、著者らの長期にわたる高山帯での過酷な調査によって明らかになった、驚くべきライチョウの生態や知られざる厳冬期の生活などが詳細に述べられています。同時に、低山帯から高山帯に侵入した動物による食害や地球温暖化による生息地の変化など、ライチョウを取り巻く環境が過酷さを増している現状も見えてきます。

注目されるのは、ライチョウを知り尽くした著者が高山帯でライチョウを保全するために考案した「ケージ内保護」という方法です。ライチョウのヒナの死亡率は、捕食と悪天候を主な原因として、孵化して最初の1ヶ月の間に最も高くなります。この1ヶ月を家族ごとケージ内で保護するというのです。日中は人が付き添って外で生活させ、夜だけケージ内に収容します。捕獲するのではなく、ライチョウの

家族自らケージに入ってもらおうよう誘導します。まるで、ライチョウの放牧(!)です。この画期的かつ挑戦的な方法が2012年の国際ライチョウシンポジウムで発表された時、多くの海外の研究者たちは「そんなことが本当に可能なか?」と驚きをあらわにしました。海外ではライチョウは狩猟鳥で、人の姿を見つけたらすぐに飛んで逃げってしまうからです。しかし、日本のライチョウは人を恐れませんが、その理由について、著者は、長い時間をかけて培われてきた、畏れ敬いながら自然と共生する日本人の生活文化によると述べています。

還暦を超えてなお若者を凌駕する行動力を発揮する著者が、学生や多くの協力者らとともにライチョウの生態の解明と保全に挑んできた軌跡をたどりながら、われわれ日本人の文化についてもじっくりと考えさせてくれる1冊です。

【笠原里恵】



私たちはこの「奇跡」を未来につなげられるか?

レポート

羽田健三業績レビュー<前編>
~カモ科鳥類社会のすみわけ~
(公財)宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団 嶋田哲郎

日本でガンカモ類の研究をすると、だれもが必ず知る名前が羽田健三である。羽田は20世紀後半に日本の鳥類生態学の礎を築いた研究者の一人である。編著「鳥類の生活史」には、信州大学教授であった羽田の研究室の60名余りによる91編の論文が収録されている。その中に、1950年代から1960年代に公表された18編からなる羽田の学位論文「内水面に生活する雁鴨科鳥類の採食型と群集に関する研究」がある。

日本鳥学会2013年度大会で、渡辺順也氏、須川 恒氏とともに、私はガンカモ類重要生息地ネットワーク支援・鳥類学研究者グループ:JOGA第16回集会「羽田健三業績レビューと今後の展望—ガンカモ類の形態を中心に」を企画した(<http://www.jawgp.org/onet/jgprop.htm>)。その中で私は、羽田の学位論文を読み返し、「羽田健三業績レビュー」として発表した。羽田は湖沼におけるカモ類の群集構造が湖の生産性と安全性によって異なることを明らかにし、そのすみわけを、一般的な生態学的地位(食物、採食の場所や様式)に、採食体制(筋肉、骨格)と消化器官を加えた幅広い概念である採食型によって説明した。ここでは前編・後編の2回にわたり、羽田の業績を振り返る。今回は羽田が示したカモ科鳥類社会のすみわけについて紹介する。

カモ科鳥類社会の階層

図1は羽田が示したカモ科鳥類社会の区分である。最初に種の社会があり、次に採食方法、さらに日周行動を組み込んで、いくつかの階層に区分している。この区分をベースに、カモ科鳥類社会の群集構造の解明、すなわちカモ類がどのようにすみわけをしているかを説明している。

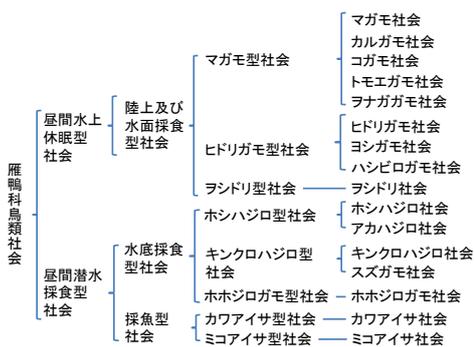


図1. 生活形によって区分されたカモ科鳥類社会。羽田(1986)をもとに作成。

の分布を調べ、それぞれの種が湖沼内の異なる場所に生息していることをもって種ごとにすみわけしているとした。第二段階として、長野県に加え、西日本の12湖沼を調査し、湖沼間でのすみわけを論じた。ここでは採食方法に応じて水面採食性、水底採食性、魚食性に分け、その群集構造が湖の湖沼型(貧栄養、中栄養、富栄養)によって変化することを示した(図2)。青木湖のような貧栄養な環境では水

面採食性カモが優勢し、諏訪湖のような富栄養な環境では水底採食性カモ、魚食性カモが優勢する。そして中栄養な環境では、その中間の群集構成を示すことを明らかにした。さらに湖沼型だけでなく、狩猟の有無による安全性の指標も加え、貧栄養で安全な湖沼に昼間水上休眠型社会(水面採食性カモ)、富栄養だが狩猟があるため安全でない湖沼に昼間潜水採食型社会(水底採食性カモ、魚食性カモ)が多いことを示した。そして第三段階として、湖沼から陸圏、水圏レベルまで考え方を拡張した。すなわち、水面採食性カモ類は日中水圏で休息し、夜間陸圏で採食、水底採食性カモと魚食性カモは日中水圏で採食し、夜間も水圏で休息する。カモ類を調査している人ならば、上述のことは経験的に理解できると思う。しかし、1950年代にカモ類の採食方法と日周行動に着目し、湖沼内から水圏、陸圏へとすみわけの適用範囲を拡張していく考えを提示したのは、まさに慧眼である。

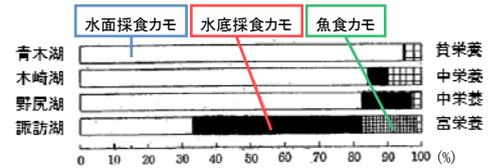


図2. 湖沼型によるカモ類のすみわけ。(羽田 1986)

カモ類の種間相互作用

羽田は種間の相互作用にも言及し、独存、群れ形成、社会的干渉の3つのパターンがあるとした。独存とは、マガモとカワアイサのように互いに無関係であること、群れ形成とは、天敵に対する集合性で、猛禽類の接近にもなって混群を作るときにみられる行動である。社会的干渉では、カモ類には順位制があると述べている。天敵に対する安全度の高い場所を占める順番は種ごとに決まっている。またその干渉の度合いは群れサイズによって変化し、個体数が少ない種は多い種に混じり、社会的干渉の度合いは低下する。越ヶ谷鴨場のカモ類の分布(図3)において、羽田は安全性の一番高い場所をマガモが占めていると説明している。蛇足だが、私が千葉県北西部に点在する池でカモ類を調査したところ、各池のマガモとカルガモの個体数密度は反比例の関係にあり、羽田のいう社会的干渉を強く意識した。

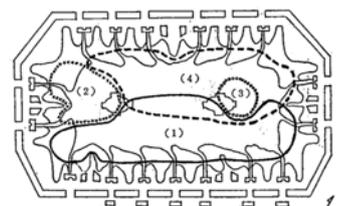


図3. 1959年12月27日の越ヶ谷鴨場のカモの分布。(1)マガモ、(2)カルガモ、(3)オナガガモ、(4)コガモの順で順位が高い。(羽田 1986)

オナガガモ、コガモなどは、日中休息しているものもいるが採食しているものも多く、実際のカモ類の行動パターンは羽田が示したものより複雑である。また餌づけなど羽田の時代にはなかった社会的環境の変化もある。羽田の示したカモ類のすみわけは、現在ではあてはまらない部分もある。しかしながら、カモ類のすみわけを体系化し、後学者にカモ類をみるときの道標を与えた功績は偉大である。

引用文献

羽田健三(編). 1986. 鳥類の生活史. 築地書館, 東京.

オシドリ 英: Mandarin Duck 学: *Aix galericulata*

1. 分類と形態



写真1. 左がメス、右がオス。 [Photo by 上山義之]

分類: カモ目 カモ科

全長: 450mm 翼長: 214-250mm
 尾長: 90-118mm ふ蹠長: 33-41mm
 嘴峰長: 27-32mm 体重: 443-550g

羽色:

繁殖羽のオスは、頭頂・後頭が暗緑色で冠羽があり、顔は白く、胸は褐色を帯びた紫色で胸側面に黒色と白色の横帯が2条ある。側面は黄褐色で、体下面は白。三列風切の内側1枚は大きく橙色で、帆形をしており銀杏羽といわれる。翼は暗褐色。メスは暗灰褐色で、側面には楕円形の白斑があり、腹部は白。非繁殖羽(エクリプス)のオスはメスに似るが、嘴が赤い。

鳴き声:

オスはウイブ、ウイブと低い声で、メスはクアツ、クアツと低い声でなき、飛翔中には雌雄ともグアツ、グアツとなく(清棲 1965)。また威嚇や警戒のときにはブフツブツ、メスに呼びかけたり追うときにはウイウイ、ミュツミュツなど、状況により様々な声を出す(藤巻 2006)。

2. 分布と生息環境

分布:

中国東部、台湾、サハリンを含むロシア極東の南部、朝鮮半島、日本で繁殖する。日本国内ではおもに北海道(藤巻 2008)、東北地方、関東地方北部(藤巻 2013)、中部地方北部で繁殖し、関東地方から西部で越冬する。

生息環境:

繁殖期にはおもに山間部の湖沼(ダム湖を含む)や河川など水域が近くにある森林に生息する。しかし、札幌市では大学構内、学校の校庭、公園にある大木の樹洞、国道沿いの街路樹の樹洞で繁殖した例もある(新田ほか 2012, 新田・早川 2013)。非繁殖期には、山間部の開水面のある湖沼や河川のほか、平野部の水域、まれに海岸にも生息する。周辺を森林で囲まれ、隠れ場所があるような所が好まれる。ごく少数の個体(おもにオス)だが、北海道のような寒さの厳しい地域で越冬することもある。

3. 生活史

繁殖システム・生活史:

一夫一妻で、多くの個体は冬の間につがいを形成する。繁殖地では4月になってもまだつがいにならず群れでいる個体も見られるが、5月にはほぼつがいになる。5

月上旬・中旬に産卵し、6月下旬頃までが抱卵期である(図1)。オスは抱卵期前半までは巣の近くにおり、メスが採餌に行くときには付添うが、6月上旬、オスの換羽が始まるころにはつがいが解消する。ヒナは6月中・下旬に孵化し、メスと幼鳥の家族群で行動し、8月中には家族群は解消する。この期間、オスはよくオスだけの群れでいる。その後冬にかけては雌雄ともに群れとなり、生息地によっては数千羽の群れになることもある。

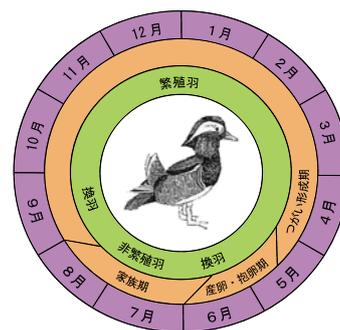


図1. オシドリの生活史。

巣:

おもに樹洞を巣とする。北海道ではクマガワの巣を利用する例がある。このほかまれに石垣の隙間(清棲 1965)、鉄橋の橋脚の穴(川本ほか 1993)に巣を造る。また巣箱もよく利用する。



写真2. ヤチダモ樹洞 [Photo by 早川いくこ]

卵:

卵は白色で、日の経過とともに黄褐色を帯びることがある。大きさは長径 50 ~ 60mm, 短径 36 ~ 40mmで、まれに正常卵の半分以下の異常卵がみられる(藤巻 2006)。一腹卵数はおもに7~12卵であるが、22卵, 33卵(清棲 1965, 藤巻 2006)の例や巣立ち雛18羽(直井 2004)の例もある。33卵の場合では巣内でメス2羽が争うのがビデオに記録されており、これらの多い産卵数の例は種内託卵の可能性がある。



写真3. 巣の中。 [Photo by 中村和弘]

抱卵・育雛期間:

メスだけが抱卵し、抱卵期間中は早朝と夕方に採餌のため巣を離れる。抱卵期間は30日前後。孵化直後のヒナは幼綿羽に被われ、体内にまだ卵黄が残っているため27g前後だが、孵化後3~4日で16~18gとなる。ヒナは早成性で、孵化後1~2日で巣立つ。巣立ち時翼長は30mm前後で、まだ風切羽は出ておらず、巣穴から落ちるように地上に降りる。多くの場合、巣の下には落葉が堆積していたり、



写真4. オシドリの親子。 [Photo by 新田啓子]

草地となっている。裸地のこともあるが、ヒナが着地のときに怪我をすることはない。雌親は巣立ったヒナを連れて近くの水域に移動する。ヒナは約3か月で親とほぼ同じ大きさになる。

4. 食性と採食行動

食物はおもに植物質で、イネ、コムギ、ヒエ、エノコログサ、イヌタデ、ミゾソバ、アズキ、ダイズなどの種子、キンミズヒキやツユクサの漿果、クヌギ、アカガシ、マテバシイ、ミズナラなどの堅果などだが、水生の甲虫類、トビゲラ類、アミメカゲロウ類、トンボ類、クモ類、腹足類、小魚などの動物質のものも食べる(清棲 1965)。また春から初夏にかけてはオタマジャクシやカエルもよく食べる。他のカモ類に混ざり、人の撒くパンのような加工食品を食べる例も観察されている。食性は季節変化し、6月頃には水田などで水草の若葉、浮き草、草の種子、水生昆虫などをよく食べ、晩秋から春先まではドングリが主食となる(日本野鳥の会鳥取県支部 1997)。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● 性比のアンバランス

越冬地での性比は、オス6に対してメス4で、オスが多い(細谷 1995)。冬の間には多くのつがいが形成され、雌雄2羽仲良く並んでいるのがよく見られるが、メスを獲得できないオスもいる。繁殖地では5月までには多くの個体はつがいにあって、メス単独の例はないのに、オス単独、またはオスだけの群れはよく見られる。これは、性比のアンバランスのせいと思われ、抱卵期の初期までオスがメスをガードする理由もこんなところにあるかもしれない。

● 保護上の課題

オシドリはかつて狩猟対象であったが、1925年10月13日に狩猟鳥から除かれた。狩猟対象からはずれたことで、捕獲される心配はなくなったが、生息に適した場所の減少により、生息に対する脅威はなくなっていない。このような中で、鳥獣保護区の設定など法的規制によって、オシドリの保護にある程度の効果が得られている。例えば、鳥取県で調査された約600か所のうち、オシドリの生息数が多かった上位36か所の72%が鳥獣保護区または銃撃禁止区域であった(日本野鳥の会鳥取県支部 1997)。



写真5. オシドリの生息環境。林に囲まれた水域が好まれる。

しかし、森林伐採、農地造成などによる営巣環境や採餌環境の減少、溜池の減少による越冬地の縮小など、生息環境の悪化が進んでおり、レッドデータブックにおいてきちんとしたオシドリの位置づけをし、保護対策必要性の科学的な根拠としなければならない。

レッドデータブックは国(環境省)のほか、都道府県でもまとめられている。オシドリのランクは自治体により異なるが、都道府県の7割近くでなんらかのランクに挙げられており、4割近くでは準絶滅危惧またはそれに準ずるランクに位置

づけられている。これらの評価はこの種に対する保護対策の必要性の根拠となる。ただ、国のレッドデータブックでオシドリは「情報不足」である。冬のガンカモ調査結果では、日本におけるオシドリの生息数は2万羽前後である。しかし、繁殖期における生息数に関する資料はまったくない。国のレッドデータブックに掲載される鳥類の種・亜種の評価は、原則として繁殖個体群の大きさを基準としているため、オシドリのランクは依然として情報不足のままである。この種のレッドデータブックにおけるランクを決めるためには、繁殖期の生息数を明らかにする必要がある。

オシドリの保護対策を進める上で、人工増殖・放鳥の問題がある。野生動物の生息数を増加・維持する方法の一つとして、飼育下で繁殖させ野外に放すことがある。一部の動物展示・飼育施設では、かつての生息地にオシドリを再現するため、飼育下で増殖したオシドリを放鳥している。しかし、日本で飼育されているオシドリの多くはオランダから輸入されたものといわれている。もともとアジア産であることは間違いないが、アジアのどの地域のものかは不明である。地域によって遺伝的に異なる集団が生息している可能性もあるので、人工増殖・放鳥は、遺伝的な問題がないことを確認した上で行うことが望ましい。

6. 引用・参考文献

- 藤巻裕蔵. 2006. オシドリ資料集2・日本のオシドリ—形態・分布・生態—。日本オシドリの会, 美唄。
- 藤巻裕蔵. 2008. 北海道におけるオシドリの繁殖期の分布。森林野生動物物研究会誌 33: 34-38。
- 藤巻裕蔵. 2013. 関東地方におけるオシドリの分布。Strix 29: 89-94。
- 細谷賢明. 1995. 鳥取県・糸録池に周年生息するオシドリの年変動と性比。1995年度日本鳥学会発表要項。
- 川本美千夫・沢田千晶・角永登. 1993. オシドリによる橋脚の穴利用。Strix 12: 231-233。
- 清棲幸保. 1965. 日本鳥類大図鑑Ⅱ。講談社, 東京。
- 直井清正. 2004. 傷病鳥保護の問題点。生物教育(岐阜県高等学校教育研究会生物教育研究部会誌) 49: 15。
- 日本野鳥の会鳥取県支部. 1997. 鳥取県のオシドリ。日本野鳥の会鳥取県支部, 米子。
- 新田啓子・早川いくこ・小林保則. 2012. 札幌市の市街地におけるオシドリの繁殖事例。Strix 28: 115-119。
- 新田啓子・早川いくこ. 2013. オシドリ雌の行動パターンから営巣木を発見する方法と巣立ち日予測に関して。山階鳥類学雑誌 44: 102-106。

執筆者

藤巻裕蔵

帯広畜産大学名誉教授
日本オシドリの会会長



かつてはノネズミ類が研究対象であったが、1970年ころから鳥類についても調査を開始し、1975年以降は鳥類だけを研究対象としている。現在のおもな研究テーマはエゾライチョウの生物学、北海道における鳥類の分布である。分布については5kmメッシュを単位として記録を蓄積し、これまでに約30種の鳥類の地理・生態・垂直分布を明らかにした。このほか、オシドリ、オオジシギ、ノビタキ、ハシブトガラ生物学にも関心があり、できるだけデータを集めるようにしている。

お知らせ

モニタリングサイト1000の交流会・研修会を開催します

植田睦之・神山和夫・守屋年史

環境省のモニタリングサイト1000のガンカモ類調査, 森林草原調査, シギ・チドリ類調査の交流会/研修会を開催します。結果の紹介や各地で鳥の調査をされている方の調査の発表, 情報交換を行ないます。いずれも参加費は無料で, 鳥の調査に興味のある方でしたらどなたでも参加することができます。みなさまのお越しをお待ちしています。

■ガンカモ類調査 交流会

全国のガンカモ類の動向, 茨城県のガンカモの推移, さらに震災の影響などについてご紹介します。

詳細は http://www.bird-research.jp/1_event/gankamo20131130.html

霞ヶ浦環境科学センター(茨城県土浦市)

11月30日(土) 13:00~17:00

■森林草原調査 交流会/研修会

2日間にわたって開催。1日目は成果の報告や情報交換, 2日目は調査方法に関する野外実習です。

詳細は http://www.bird-research.jp/1_event/monita.html

仙台市民活動サポートセンター(宮城県仙台市)

12月14~15日(土・日)

九州大学伊都キャンパス工学部講義棟(福岡県福岡市)

1月11~12日(土・日)

グリーンビレッジ交野(大阪府交野市)

1月25~26日(土・日)

日本野鳥の会事務所(東京都品川区)

2月8~9日(土・日)

■シギ・チドリ類調査 交流会

シギ・チドリ類や湿地環境についての話題提供や意見交換をおこないます。

WEBサイト準備中。

三重県教育文化会館(三重県津市)

1月25日(土) 13:30~17:00

図書紹介

スズメ つかず・はなれず・二千年

三上 修 著/岩波書店 定価 1,500円(税別)

身近な鳥の意外な側面をたっぷり楽しめる本を寄贈いただきましたのでご紹介します。

朝, 窓の外でちゅんちゅんと鳴いていたり, 水田を飛び回っていたりする茶色い小鳥の集団を目にしたことがない方はいないのではないのでしょうか。そう, それがスズメです。でも, ちょっと思い出してみてください。スズメってどんな姿でしたっけ? くちばしの色は? ほっぺたは? ...行動はどうでしょう? 子育てはどこで? 何を食べている? ...あれ? なんだかもやもやとしてきませんか? すぐ隣で生活している鳥なのに, 意外と知らないことが多いのです。

そんなスズメの知られざる生態を, 小気味良い文章ですっきりと解説してくれているのがこの本です。生態だけではなく, スズメと人間の歴史的, 文化的な関わりについても盛り沢山の内容です。スズメは, 日本最古の歴史書である古事記からすでに登場し, 舌切り雀のような昔話に現れたり, 俳句, 短歌, 絵画の題材に用いられたり, 飼育されたり, 串焼きになって人間に食べられたりしてきました。様々な文化に取り込まれているスズメですが, 稲を加害する害

鳥として農家さんの悩みの種になってきた一面もあります。愛されたり憎まれたり, まさに, つかず, はなれずの仲といえましょう。近年スズメの減少が心配されていますが, 今後もちゅんちゅんが聞こえる社会であってほしい, スズメとのいい関係を続けていける人の心であってほしい, という著者のメッセージが心に響きます。

本書を読むと, スズメの様々な営巣場所を知ることができるだけでなく, なんとスズメの巣を見つける秘儀も伝授してもらえます! 家の周りで必ず見かけるスズメなのに, どこに巣があるか分からないというあなたも, 今度の春には巣探しの達人になっているかも! ? とりのなん子さんのイラストも可愛い, 奇妙な隣人(鳥)が妙に愛おしくなってしまう一冊です。おススメ! 【笠原里恵】



バードリサーチニュース 2013年10月号 Vol.10 No.10

2013年10月31日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ

〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9

TEL & FAX 042-401-8661

E-mail: br@bird-research.jpURL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 青山夕貴子・高木憲太郎

表紙の写真: ジョウビタキ